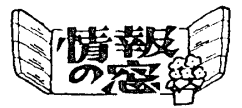


# 第20回 FMES・研連シンポジウム 「経営戦略とリスクマネジメント」

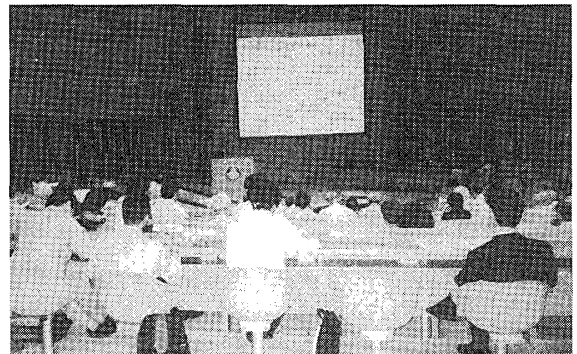


矢部 博 (東京理科大学)

FMES (経営工学関連学会協議会) は日本 OR 学会を含む九つの学会から組織される協議会であり、代表的な役目が三つある。一つ目は、日本学術会議に経営工学関連学会の意見を進言することであり、久米均 FMES 会長 (日本学術会議第5部部長, 中央大学) が代表者として出ている。二つ目は JABEE との窓口になることで、FMES/JABEE 委員会を組織している。そして三つ目が、日本学術会議経営工学研究連絡委員会・日本学術会議経営管理工学専門委員会と共催で年に1回シンポジウムを開催することである。これは9学会の交流と一般社会への研究普及を目的としたもので、今回は日本 OR 学会が幹事学会になり7月9日 (金) 午後日本学術会議講堂で開かれた。また、それに先駆けて午前中、別室で FMES 学会長会議も開かれた。朝からの猛暑にもかかわらず、シンポジウムに94名もの方々に参加していただき幹事学会として感謝している次第である。

現代は情報化社会といわれているが、コンピュータが発達した反面、一部の地域で発生した問題が全世界に波及する危険も伴っている。今や企業経営は地球規模で考えていかなければならず、考慮すべきリスクも多種多様になった。こうした不確実な状況下で企業が適切な経営戦略を立てていかなければならない背景を鑑みて、今回テーマに取り上げられたのが「経営戦略とリスクマネジメント」である。

まず、久米均氏 (FMES 会長) の開会の挨拶から始まった。FMES の活動報告、第19期日本学術会議についての説明の後、社会のための科学として改めて経営工学を見直す必要があるとの提言があった。続いて4件の特別講演があった。まず刈屋武昭氏 (明治大学) より、戦略的事業リスク経営に関する講演があった。ERM について解説があり、企業の社会的信頼を回復するために米国で Sarbanes-Oxley 法が制定された背景が述べられた。さらにリスクの定量化やリスク測定について触れ、ERM の事例としてデュポン社と



東京ガスの取組みが紹介された。次に、田宮英和氏 (三井物産) が総合商社のリスクマネジメントについて講演した。総合商社を取り巻く時代環境ならびに三井物産の位置づけが紹介された。三井物産における投資リスク管理の変遷とポートフォリオ管理への移行について説明があった後、リスクの計測とその活用に関する現状報告がなされ、最後にリスク管理の将来像について言及した。3番目の中山渉氏 (東京ガス) の講演は地震リスクに対する東京ガスの取組みについてで、特に導管に関するリスク管理に焦点が当てられた。地震発生場所へのガス供給をすぐに停止するという緊急対策や復旧対策についての説明があった後、阪神・淡路大震災以降の取組みとしてリアルタイム地震防災システム SUPREME の開発に関する詳しい紹介があった。4番目の講演は山田方敏氏 (旭硝子) によるもので、旭硝子における定量的経営手法への取組みについて説明があった。ガラス事業ばかりでなくディスプレイ事業に力を入れるなど安定性と成長性を兼ね備えた事業ポートフォリオの紹介があり、資本コスト (WACC) に基づいた定量的管理手法について説明があった。最後に、シンポジウム実行委員長の今野浩氏 (日本 OR 学会会長) が閉会の挨拶をして幕を閉じた。リスクマネジメントに関して現場の担当者から直接お話を聞くことができ、非常に有意義な一日であった。